

シビルウエディング・
ミニスターが語る

心にかこむ挙式

2002年11月24日。

「シビルウエディング・ミニスターの入場です」

挙式の進行を務めるディレクターの声で、私のミニスタ

ーとしての第一歩がスタートしました。

挙式の場合は、高知市五台山牧野植物園内に設けられた特設ステージ。心配された季

節外れの台風もそして、暖かい日差しが一杯にふりそそぐ中を、私は司式台に向かって、「リハーサルどおりやればいいのだから、オチツイテ、オチツイテ」と自分に言い聞かせながら歩きました。

「ただいまからNさんとTさんの結婚式を開始します」
何度も何度も練習したこの

何度も書き換え苦勞して完成させた私の祝辞が、長かったのか短かったのか、選んだ言葉やエピソードが適切であったのか、だいぶ前のことなのではっきり覚えておりましたが、列席された方々から、「素晴らしい結婚式でした」「祝辞に感動しました」「結婚の証人として参加させていた

シビルウエディング・ミニスター
北村 和代氏

(きたむら・かずよ。1952年高知県生まれ。2002年シビルウエディング・ミニスターの資格取得)

す。

ミニスターの式服は、現在

は女性用・男性用がありますが、私がミニスターになった当時は男性と同じ、黒のジャケット、白いシャツに金色のネクタ

イ、パンツというスタイルでした。

胸元にあるミニスターの紋章は、恥ずかしくもあり誇らしくもあり、本番前にそれに手を添えると不思議な勇気が生まれてきます。

挙式に臨む時、私は美容院に行き髪を整えます。ショートカットなのでそのままでもよいのですが、司式を司るミニスターとして、常に凛(りん)として挙式に臨みたいと思うからです。

昨年、09年度「最優秀ミニスター賞」という素敵なお褒美をいただきました。私を支えて下さる皆さんに感謝し、スタッフと共に、これからも新鮮な気持ちでこの役目に臨んでまいります。

常に凛とした姿勢で挙式に
挑んでいる姿に最優秀賞の褒美

言葉がスムーズに出たことで、私は平素の自分に戻ると同時に、父親のエスコートを受けながらすり鉢形の階段を下りてくる花嫁の姿を、微笑みをもって迎える心のゆとりを持つことができました。

「花嫁引渡しの際」を待つ新郎のキリッとした表情と、司式台に向かって父と歩んでくる花嫁の輝くばかりの美しさに、私の胸には熱いものが込みあげてきました。

司式者緊張の中、挙式は厳粛かつ温かい雰囲気で行進しました。新郎新婦と列席者の心が一つとなって挙式は無事終了。退場した「夫妻」が列席者に囲まれ集合写真を撮る様子を見て、私はホッとしました。

「ありがとうございます」などの言葉を頂戴したことは、はっきり覚えております。

あの日を皮切りに、私は、その後もミニスターとして挙式という大切な場所に立ち会ってきました。

私はこの役目をとても誇りに思っていますが、実際は緊張の連続の大変な仕事です。また祝辞の準備も大変、いや準備だけでなく、新郎新婦を前にすると用意した原稿の文言の一部を別のものに変えた方がよいと、瞬間に判断して入れ替えるのも大変な緊張を強いられます。それでも司式を終え、晴れて夫婦となると、打ち合わせから始まったすべての苦勞が吹っ飛びま



▶ 挙式に挑む時、必ず美容院に行き髪を整えるという北村さん(中央)